2022.11

会　報

とみじん

NPO法人富山県腎友会会報 第123号

NPO 法人富山県腎友会事務局

〒931-8443 富山市下飯野70-4

TEL (076) 407-5085　FAX (076) 407-5086

E-mail:tjk@polka.ocn.ne.jp　URL：http://www.tomijin.jp

郵便振替口座番号 00700-3-12132

90 歳を過ぎても現役

長谷川眞常先生インタビュー

長谷川病院前院長の長谷川眞常先生は、92 歳を迎えられた今も現役医師としてご活躍されています。

本誌では、眞常先生に開院時の思い出や体調維持の秘訣などをおうかがいしました。

1 透析医療を始めた時のこと

どのようなお気持ちから透析医療を始められたのですか

私が、今の星井町に泌尿器科クリニックを開設したのが、昭和 53 年（1978 年）で、一寸正確性を欠きますが、その 3～ 4 年前頃から日本でも人工腎臓による血液透析が開始され、私の勤務していた富山市民病院でも腎内の先生方によって約 1 年半前頃から血液透析が行われていたように思われます。

開業にあたり、泌尿器診療のことで頭が一杯だった私にとって設計図の中に透析室のスペースはとっていなかったのですが、金沢、福井で泌尿器科を標榜して開業していた 2 人の後輩達のクリニックを見学に行った時、2 人の先生が口を揃えて言った言葉『泌尿器科は尿路の外科治療を扱う診療科と簡単に言うが、その尿を作る腎臓という偉大な臓器の存在を忘れるな』と私達に指導してくれたのが外ならぬ長谷川先輩だった。あの時の教えに従い、私達は人工透析を取り入れました。その先生が開業に当り『透析設備を置いていないのは可笑しいです』『泌尿器科手術の術中管理に準ずる体制で取り組めば、スタッフもすぐに馴れますよ』。その言葉を聞き、そう言われて見ると、それまで 13 年間市民病院泌尿器科で治療して来た患者さんの中に腎機能が弱りつつある 5 名の患者さん達の顔が浮かび、福井をあとにした車の中で「そうだ血液透析もやろう」と強く心に誓った次第です。

市民病院の送別会の席上、泌尿器科診療だけでなく透析医療を加えて、初年兵に立ち戻り治療に取り組む所存です。と語ったのがつい昨日のように想い出されます。

余談になりますが、『長谷川医院が透析も行うようだ』との噂を聞いた 3 名の患者さんが私のところにおいでになり、『自分たちは市民病院で透析導入を受け、今、市内の病院で維持透析を受けている。噂によると先生のクリニックでも透析も始められるとのこと、出来ればこの後先生のところで透析を受けたい』との申し出を受け、泌尿器科患者の Y さんと共に計 4 名の患者さんで透析医療をスタート致しました。

2 現在のこと

診察に出ておられる時間帯や内容について

毎週火曜日の午前中を診察日としております。当初は保存期腎不全の患者さんもおられ、賑やかでしたが、今は腎内の先生にお任せしています。昔からの泌尿器科の患者さんと世間話を交え乍ら、楽しいひと時を過ごしております。

診察風景

現役医師を続けておられる原動力、心の支えとなっているものは何ですか？

昭和 30 年大学卒業以来『朝起きたら白衣に着替えて病棟に行く』といった習慣が身につき、そのような動きをしているようです。

『何か手伝うことがあったら、何時でもどうぞ』『但し若い先生達の診療の邪魔にならぬように』『老人性徘徊と云われないように』
以上 3 点に気をつけながら朝の病棟カンファレンス、回診に顔を出すのを日課としております。

カンファレンス

体調管理で気をつけていることがあれば教えてください（元気の秘訣）

考えて見れば体調管理上特に気を付けている点はなく、自然体で気の向くまま生きてきたようです。好奇心は人一倍旺盛で、向上心もそれなりにあると思いますが、人前で喋ることをあまり得意とせず、喧嘩は大嫌いで、口論しながら落とし所の先を考えているタイプです。

いずれにしても 92 才のこの年まで元気にすごして来た遺伝子を授けてくれた両親に感謝しております。

今楽しみなこと、趣味や継続されていることがあれば教えてください

大凧（いぐり）作りと、それを揚げることが最大の楽しみで、その中でも凧に取り付けた「うなり」の発する弦の音を聞くと、遠い昔の『童心に立ち返れる』点が、私の長寿の一因となっているのかも知れません。

いぐり凧色補正作業

大凧揚げで転んでからは、自分の歳を考え、凧の揚がる姿を見ることに徹することにしました。

最近、暇を見て、家内と弟夫婦 4 名で、下手な麻雀を楽しんでおります。

3 おわりに

今後の目標などあれば教えてください

粗大ゴミとならないこと。

老兵は死なず、消え去るのみ。

歌の文句のように大きな風となって、大凧揚げのお手伝いをしたい。

腎友会会員（透析患者さん）向けの言葉

日進月歩の進歩の中にあって、透析医療もより苦痛の少ない快適な治療へと進化すると思われますが、更に快適な生活を送るためにも『自己管理』が大切で、中でも食事とリハ

ビリが健康管理上極めて重要と考えます。本当の幸せは他に頼らず自分の手で掴み取り生き抜いて下さい。

顧みると、当院は年 1 回開催される「富山県腎疾患人工透析研究会」の第 2 回目より毎年演題を発表し、日頃当院で行われている透析医療の更なる発展を目指し 50 年を迎えています。今後とも研鑽を重ね、皆様のお役に立てるよう願っております。

追記

この取材を終えた後、富山長谷川病院風神会のメンバーと共に 10 月 23 日に「第 43 回心護杯 日本凧の会 2022 年秋季横浜全国大会」へ参加して参りました。

凧揚げを楽しむ臨港パークは、横浜港のランドマークである、みなとみらいが中心で、海を望む素晴らしい会場でした。

私の思いが通じたのか天候にも恵まれ、結果、心護杯（本会における最高の賞で、創作、伝統を問わず凧の未来を担う凧）として、念願の日本一の賞を獲得することが出来ました。

表紙絵にひと言
－ここからどうする－

米寿の「祝い凧」として自分で作った８畳大凧。分解・組み立て方式の富山型いぐり凧『左馬号』の勇姿です。（２０１８年5月２０日撮影）

揚げ終えて大地に降ろす瞬間を捉えた図でありますが、当日は風が強く、このまま揚げ糸を操り出せば、この大凧はもう一度大空に舞い戻り、上空で居座ることもあり得る状態です。

かといって降ろそうとして、ただ無雑作に凧に近づけば、風に煽られた大凧は暴れだし手がつけられません。では「ここからどうする」揚げ手（「蕎文」店主 今井武文さん）の後姿から『スキ』のない手慣れた動きが期待されます。

【解答】

揚げ人の左手を注目してください。左手の指はすでにつり糸に掛かっています。

束ねられたつり糸の上 1/3 を掴み、手前に引くと、凧は前かがみにお辞儀をする形となり、強い風を避けることになります。同時に中心竿の頭を把持出来れば、あとは強風下の持ち運びも平気です。